

質屋弥平縁起物控



森野
熊

鳳山
印

双子蠟燭

背が大きく曲がった小柄の男が、弥平の質屋の暖簾をくぐった。

「またおめえかい」

「御鼻頂（ごひいき）いただいてやす」

山吹色の着物の上から遍路の着るような装束を羽織るという珍奇な格好のその男は、背負った風呂敷を丁寧に下ろすと土間にそっと置いた。

「相変わらず小汚ねえ格好しやがって。てめえのせいで商売あがったりだ」

「旦那、勘弁おくんせえ。以前にも言いやしたが、あっしは商人じゃありませんので……」

「ったく、しょうがねえなあ。今度は何だ」

そう言いながら苦笑いする弥平はどこかうれしそうだ。

「ありがとうございますやす。これもまた大層な縁起物でございますよ」

「また縁起物かい。てめえはそう言っちゃあ何度も俺を誑（たぶら）かしやがる」

「滅相（めっそう）もございやせん。あっしは旦那が少しでも多幸であればと……」

わかったわかった、と弥平はにやけながら手をひらひらと降った。

「話くれえ聞いてやろうじゃねえか。その塊は何だい」

男は風呂敷を広げ、大きな白い塊を取り出した。その形は高灯籠（たかどうろう）を綺麗さっぱり、縦半分に割ったような姿だった。

「こいつあ『蠟燭』でございます」

「ほう、白い蠟燭たあ珍しいな」

弥平は見定めようと蠟燭を抱えてみた。蠟燭はずっしりと重く、少し育った赤子のようだ。外皮も滑らかで、良質の蠟であることがわかった。芯には少し焦げがあり、かつて灯された形跡がある。だが蠟も芯もありきたりな素材でできており、弥平の目には特に変わった物には映らなかった。あえて変わっていると言うならば半分に割られていることで、蠟だけでなく芯まで真っ二つとなっているようだった。

「だが割れてんじゃ売り物になんねえな。こっちは質屋なんだ。売れねえものは買い取れねえ」

「旦那もお人が悪い。こいつがただの蠟燭じゃないことぐらい、おわかりでしょう？」

ふふ、と弥平はにやけた。

「こいつは、『双子蠟燭』って言われてやす」

「双子ってことはこいつがその片割れで、どこかにもう半分があるってわけかい」

「へえ、お察しの通りで」

男はその出目でぎろりと弥平を見上げた。

「なら単刀直入に聞こうじゃねえか。こいつにはどんな願掛けがしてあるってんだ」

「へへ、旦那もお気が早いことで」男は得意では無さそうな笑顔を作って見せた。「こいつには不思議な神通力が宿っていやす。この蠟燭を灯すると不思議と福が舞い込むってもっばらの噂なんで」

「ほう、そいつあ面白そうだ。だがそうすると妙だ。なんでそいつが今でもこうしてここにあるんだ？ 俺だったらあっという間に燃やしきっちゃうぞ」

「さすが旦那だ、何でもお見通してわけ。こいつは今言った通り、片割れがいやしてね、そいつがどこにいっちゃったかまではあっしにもわからないのでございやす。ただ、こいつはただ燃やせばいいってわけではねえんで。こいつが福を呼ぶのは、双子のうちどちらか一方だけが灯ってる間だけなんでやすよ。二ついっぱい灯がついたら、今度は逆にとんでもない不幸がその持ち主に舞い込むようにできて

いるわけで」

そのときだった。不意に店先の暖簾が揺れ動いたと思うと、一人の初老の男が入ってきた。

「邪魔しますよ、灘屋さん」

弥平が顔を上げると、そこには大黒屋の主人、文左衛門の姿があった。

「これはこれは文左衛門さん。いらっしゃい。何か御入用で」

すると文左衛門はこういった。

「いやね、偶然通りかかっただけなんですけどね……今の話、全部聞かせてもらいましたよ。その蠟燭、いくらですか？」

「へい、きっぱり一両でございます」

蠟燭売りはすかさず答えた。

「いや、文左衛門さん、悪いがそいつぁ止めといたほうが……」

「ということは弥平さんはお買いにならないと。なら私が買わせていただきますよ」

弥平は止めに入ろうとしたが、文左衛門は構わず話を続けた。

「双子のもう片方が灯いていると不幸を招くというものでしょう？ 聞いていましたよ。聞いた上で買いたいと申しているのです。御坊、私が買うのはいけませんか？」

「いえ、買っていただけるのであればどなたにでもお売りしやすぜ」

蠟燭売りはうやうやしく頭を下げた。

「ならば商談成立ですね。ですが申し訳ない、あいにく手持ちに小判は無くてね。ちょっと遠いのですが、私の店まで来てもらえますか」

「へい、ありがとうございます。それでは早速参りやしょう。旦那、また寄らせていただきやす」

そう言うと文左衛門と蠟燭売りは、あつけにとられた弥平をよそにそそくさと店を出て行った。

「ったく、しょうがねえ野郎だな……」

弥平があつけにとられていると、奥から番頭の銀次が出てきた。

「旦那様、よかったですか？ またあの奇異な御坊の持ち込んだ品だったのでしょうか？ 何かあるか、わかったもんじゃありませんよ」

銀次は不安そうに弥平に尋ねてきた。

「言っとくが俺は止めようとしたぜ。まあ、いいんじゃないか？ 今回は文左衛門が直接買い取ったんだからよ。俺らにや関係ねえよ」

そりゃそうですけど、と銀次は呟く。

「それに文左衛門のことは銀次、てめえだって嫌ってなかったか？ あいつがどうなろうと、知ったことじゃねえだろう？」

「え？ ええ、そうですが……嫌ってって、文左衛門さんには何か不幸が起こるということですか？ ああ、旦那様、まさかもうお分かりになられたのですか」

「ああ、見切ったぜ、そのからくり」

蠟燭売りが大黒屋と出て行ってから数日が経った。

弥平は日が傾いてきたため店じまいしようと暖簾を下げていると、丁度銀次が使いから帰ってきた。

「旦那様、ただいま戻りました」

「おう、遠くまでご苦労だったな」

「いいんですよ、この程度の距離で馬なんて勿体無いですから」

そう言うとき銀次は暖簾を弥平から受け取り、一緒に店の中へと入った。

「そうそう旦那様、さっき文左衛門さんの軒先を通ったんですけどね、ほら、あの蝋燭を買われた」

ああ、と弥平はうなずいた。

「中から大層な笑い声がひっきりなしに聞こえていましたよ。皆さん大笑いされているようでした。よっぽど楽しいことがあったのでしょうかね。今回御坊が持ち込んだものは正真正銘の縁起物だったんですかねえ？」

「何、もうそんな状態になってたのか！ やべえな……銀次、文左衛門とこに急ぐぞ！」

「え、今からですか？ もう通りも暗いですよ！？」

「いいから行灯もってついてこい！」

そう言うとき弥平はおっとり刀で店を飛び出した。

「ごめんよ、文左衛門さん、いるかい！？」

大黒屋まで来てみたものの、扉は門(かんぬき)で閉じられていた。何度か戸を叩いて見るが誰も出てくる気配がない。

そのとき、奥から数人の笑い声が聞こえてきた。

「銀次、勝手から入るぞ」

「え、ちょっと、旦那様！」

断りなしに銀次は弥平のあとを追いかけた。

裏から中へ入った瞬間、突然異様な香りが漂ってきた。

「旦那様、何なんでしょう、この匂い……」

「あっちみてえだ。銀次、ついてこい」

笑い声は蔵の方からするようだった。蔵に近づくと匂いはさらにひどくなった。

「みなさんここにいらっしゃるようですね……一体商いを放って何をなさっているのでしょうか……」

蔵の中からは文左衛門だけでなく、何人もの笑い声が聞こえてくる。

「大黒屋さん、そこにいるのかい」

蔵の前で弥平が声を張り上げた。その瞬間、笑い声がぴたりとやんだ。すると蔵の戸がすっと開き、中から文左衛門がぬっと顔を出した。文左衛門はこれ以上ないほどに満面の笑みを称えており、弥平たちを見たあともなぜか笑いを堪えるのに必死な様子だ。

「これはこれは弥平さん、こんな朝早くいったいどうなさったので」

「え、朝早くって何をおっしゃって……もう酉の刻にも」

と話かける銀次を弥平は制した。

「申し訳ありません、大黒屋さん。ちょっと今から伊勢へ行こうと思ひましてね、握り飯のひとつでもこさえていこうかとお思ひましたら米が切れてしまいまして、ちょっとわけていただけないかと参りました次第で」

「そうですかそうですか、それはお困りでしょう。昨日はここらへんも雨でしたから、これでは草鞋もほどけてしまう」

意味不明な会話に目を白黒させている銀次を横に、弥平はさらに会話を続ける。

「ええ、そこで何か楽しそうな笑い声が聞こえて、ちょっと大黒屋さんを覗いてみたのでございます」

「そうですかそうですか、ならば是非こちらへどうぞ。遠慮はいりませんよ、みなさんお待ちですから。とっておきの蝋燭を馳走いたしましょう」

そういうと文左衛門は再び蔵の中へと入って行った。

「銀次、おい、銀次」

「は、はい、何でしょう」

あまりのできごとに呆然としていた銀次は弥平に呼ばれ我に返った。

「今すぐここらへんに居る男を全員集めてこい。それと蘭法に詳しい医者先生、知ってるか」

「ら、蘭学ですか？ ええ、存じておりますが……」

「すぐに呼んでこい！」

銀次が大黒屋を飛び出すと、程なくして数人の男がやってきた。

「これはこれは灘屋さん、こんなところで一体なんだったんですか……うわ、何だこの匂い」

男たちは一斉に鼻を押さえ咳き込んだ。

「皆さん、説明はあとで存分にいたしますから、申し訳ないが少し力を貸してください。不審に思うのはごもっともですが、今は大黒屋さんの命に関わることなのです。責任は一切私が持ちますから、どうか」

男たちは訝しく思いながらもわかったと答えた。

「この匂い、あまり嗅がないでくださいね。今からこの中にいる大黒屋さんたちを外へ運び出します」

「な、なんだったって」

「扉を開けますから、皆さん速やかに連れ出してくださいね。行きますよ、息を止めて！」

弥平は勢いよく蔵の扉を開けた。そして夕闇の迫る薄暗い蔵の中を見て、一堂は絶句した。

蔵の中にはただ立って突っ立ってケラケラ笑う者、狂ったように踊る者、行李に向かってひたすら怒る者、呆然と虚空を見つめ続ける者がいた。横たわっている者も何人かいたが、誰も死んでいるわけでもなく寝ているわけでもない。半目を開き、深く呼吸し、ただただ虚ろな表情だった。弥平たちの呼びかけにも全く答えることがない。揺すってもこちらを見ない。まさに生きる屍となっているようだった。

「皆さん、すぐに全員を通りまで運び出してください！」

男たちは大慌てで店の者を運び出しはじめた。

数人の男が暴れる文左衛門を押さえつけるが、普段の姿からは想像できないほどの怪力で男どもをなぎ払っている。ほどなく取り押さえることはできたが、皆この臭気にやられてむせ返っている。

運び出された者の中には文左衛門の孫や小僧の姿まであった。そしてその誰もが一樣に虚無の目をしていた。

弥平は蔵の一番奥まで進むと、そこで煌々と光る蠟燭を見つけた。それはかつて、あの蠟燭売りが持ち込んだあの蠟燭だった。

(双子蠟燭……か)

弥平はその火を吹き消し、すぐさま他の男たちと一緒に店子を外へと運び出した。

まもなく銀次が手配した蘭法医とその助手がやってきた。大黒屋の人々は大八車に載せられ、次々と診療所へと運ばれていった。

「よし、あとは先生方に任せておけばいいだろう。皆さん、ありがとうございました」

弥平は近所の男たちに深々と頭を下げた。

「いや、いいんだけどね、それよりも灘屋さん、一体これはどういうことなんだい」

男たちは弥平に詰め寄った。

「そうですね、簡単に説明することは難しいのですが、ちょっとした間違いがあった、とだけ申しておきましょうか。私からはこれ以上言うべきではないと思うのです」

そう言うと弥平は再び頭を下げ、帰路へついた。

「旦那様、それで結局何だったのでしょうか」

灘屋へ戻る途中、銀次はたまらず弥平に尋ねた。

「おそらくありゃ、阿片の中毒だな」

「あ、あへ」

弥平は咄嗟に銀次の口元を塞いだ。

「馬鹿、大声だすんじゃねえよ！ 本物かどうかはわかんねえけどよ、少なくとも禁制品ってことは間違いねえ。あの蠟燭にゃきつと阿片みたいなものの成分が練りこんであったんだろうよ。蠟燭なんて言ったらここいらで作るものは大抵黄色だ。ありゃあきつと南蛮とかで作られたものだ」

「旦那様は最初から気づいてらっしゃったのに黙っていたんですか？ お人が悪い！」

銀次は弥平の背中を軽くはたいた。

「そうだな。でも文左衛門さんも最初から分かってたはずなんだ。最初あの蠟を見た時、少しだけ焦げ目があったんだが、蠟が溶けた様子はほとんどなかった。ってことはつまり、今までの持ち主は点灯させてすぐにこの蠟燭のからくり気づいていたはずなんだ」

「からくり、ですか」

銀次は不思議そうに弥平を見た。

「あの蠟燭は二つが同時に点灯されると不幸を招くと言われていた。自分には幸運があると思ってんなら最初から点けねえ。ましてそんな危険な賭けを運のねえ奴がやるわきゃねえ。だからあれを点灯するのは、そのからくりが分かってる奴だけなんだ。文左衛門さんも最初はよそに売るつもりだったのが、禁制品とわかってつい手を出しちまった。そんなとこじゃねえかな」

「そういうことですか」

「蠟燭の形にしたのは、おそらく関所を抜けるため。半分に割れた奇形なら『曰く』がありそうだろ？ ついでに言えば双子ってのも嘘だろうよ。重要なのは半分に割れているということであって、二つ存在していることじゃあねえんだ」

ああ！ と銀次は感嘆の声をあげた。

「まあ大方、少し使うぶんには問題ねえが使いすぎたら不幸になる、ってのがこの双子蠟燭のからくりであり戒めってことなんだろうよ」

「なるほど、やはり旦那様は先代の血を引いてなさる。利発でございますね」

「てめえに褒められたって嬉しかねえよ。ってか俺がもっと早く止めさせてりゃ、文左衛門さんの子も孫もあんなことには……」

「ああ、そうでした……お孫さんたち、早く良くなるといいですね。旦那様、今度あの蠟燭売りが来たらとちめてやりましょう」

「そうだな」

そう言うと弥平はつらそうに目を落とした。

天神地祇の頂

「おう、てめえよくのこのことうちの暖簾をくぐれたな」

弥平はあぐらのまま、男に向かって怒鳴った。

「だ、だんなぁ……簡便してくんなせえ。あっしだってあんなことになろうとは……」

山吹色の着物を纏った面妖な男は、上目づかいで弥平の顔を窺う。男の天頂は良く禿げ上がり、ぬめった頭がよく見えた。弥平が懇意にしている、どこの系統の僧とも知れぬ坊主だった。

「ふふ、ま、大黒屋さんだってわかってやってたんだ。自業自得ってもんだ」

弥平は煙管（きせる）を火鉢に叩きつけ、口元を緩めた。

「そ、そうでやんしょ？ 怒ったふりだなんて旦那も人が悪い……」

坊主は頭を右の手のひらで叩いた。ぺちんという音が店に快く響く。

「まあそう言うな。それで御坊、今日は何の用だい」

「へへ、そうこなくっちゃ」御坊と呼ばれた坊主の顔がとたんに綻ぶ。「旦那、もしかして黒い烏帽子のようなもの、この御店にございやせんか？」

「ああ、それなら……これのことかい？」弥平は番台の後ろの棚に手を伸ばし、烏帽子を引っ張り出した。

「どっかの神社で神事に使ってたらしいって聞いたが」

「なんと！ そう、それでございやす！」

そういうと坊主は興奮しながら手拭いを取り出し、油を引いたように光る頭をごしごしと擦った。坊主の頭が一層光を増す。

「ちょっと失敬」

と言うと、坊主は弥平から烏帽子を奪うように受け取り、さっとかぶって見せた。

「おいおい、何の真似だい」

「ありがたや、ありがたや……」

坊主は両手を合わせて何かに拝んだ。

「一体何の呪（まじな）いだ、そりゃ。何にしろ、こいつぁ流れてねえからまだ売れねえぜ。ほら、汚れるめえに返しな」

「まさか旦那がお持ちとは思いやせんでしたぜ。旦那、そいつは誰から手に入れたんで？」

坊主は烏帽子を脱ぎ、弥平に手渡した。

「身なりのあまりよくねえ浪人が、いくつかの骨董と一緒に持ち込んだもんだ。一朱にもならなかったと愚痴を言っていたが、何でだい？」

「やはりさようでございやしたか。それでしたら旦那、あっしと旦那の仲だからお話しいたしやすが、そいつはまたたいそうな縁起物でございやすぜ」

「へえ、また縁起物かい。いいだろう、聞いてやろうじゃないか」

坊主はぺこりと頭を下げ、框（かまち）に腰掛けた。

「ありがとうございますやす。あっしの調べによりゃあ、こいつは『天神地祇（てんしんちぎ）の頂（いただき）』っていいやす。天神ってのは天におわす神々のこと、地祇ってのはこの徳川の御威光届く全ての地に遍（あまね）くおわす神々のことでさあ」

坊主は鼻息を荒くし、揚々と語った。

「やたらと難しいことを言うと思ったら、なんだ、要は八百万（やおよろず）の神さん方ってことじゃねえか」

「へい、まあ平たく言えばそうなりやす」

「まあ有難そうな名前ではあるな。頂ってなあ、きっと烏帽子の形のことなんだろう」

「さようでございましょうな。こいつをかぶりゃ、千里先も見通せ、商売繁盛、大願成就の何でもありの御利益間違いなしという一品でござい。実はね、旦那」

坊主は店の入り口をちらりと見、あたりに人がいないことを知ると、弥平の耳元に近づき囁いた。

「実は旦那、前月に柳橋の弥生屋はご存知でいやすかね。その弥生屋がこれをかぶり花鳥天神の富くじに臨んだところ、なんと、突留の百両を当てたって話で。なんとも素晴らしいご利益があるようで」

「へえ、そんなことがあったのか」

弥平は目を見開いた。

「ところがでございやすよ。その話には前座がございやしてね、弥生屋さんが当てたその前の月の話でございやす。折坂の桐生屋さんも湯川天神にて、これまた突留の百両をお当てになすってたって話なんでございやすがね、このときにも頭上にはこのありがてえ天神地祇の頂が乗かってたってんだから驚きだ。一度ならまだしも、実は二度も突留を当てていたってことで、この御利益は本物に違いねえと、弥生屋に庶民が殺到しているって話でございやす」

「はは、そいつあなんとも景気のいい話じゃねえか。俺らみてえな町民にゃ富くじ当てるのは夢だからな」

弥平はキセルをゆっくりと燻(くゆ)らせる。

「ところがでございやすよ。その天神地祇の頂、弥生屋にどこにやったのかと問うと、弥生屋の旦那はもう手元にないとおっしゃった。行方がわからなくなったとのことで、また柳橋界限は大騒ぎでございやした。みんなして江戸中引っ掻き回すように烏帽子はどこだー、烏帽子はどこだーと騒いでいる始末。そしてなぜかそれが旦那のところに来てきたという次第で」

「その話、本当か？ 持ってきたやつあそんなこと、ひとつも言わなかったな。そんなありがてえ逸話があったんなら、それを俺に話しゃもっと売値釣り上げられたろうに。俺はこいつを、ただ年季の入った骨董ぐれえにしか思ってなかったから、値もその程度にしかつけてねえぞ」

「左様でございやすか？ やはり妙でございやすな。そんだけご利益あるならてめえんどこでもってりゃ、子孫孫安泰ってもんじゃねえでやすか」

「ああ、確かに変だ。こいつあちっと調べてみる必要があるな。おい、銀次、銀次！」

すると番頭の銀次が奥からパタパタと足音を立ててやってきた。

「旦那様！ ここはそんな大声ださなくてはならないほど広くはありませんよ！」

そういいながら、銀次は弥平よりもさらに大きな声で怒鳴る。

「わりいがちよいと出かけてくるぜ。店任せたぞ」

「そんなことだろうと思いましたよ！ 旦那様、今日は寄合の日ですよ！ 遅れることだけは絶対におやめくださいよ。先代の顔が立ちませんからね！」

「わあったわあった、間に合うように帰ってくるさ。まったく、おめえの小言に付き合ったら夜が明けら」
丁度末(ひつじ)の刻を告げる鐘が鳴った。

弥平たちがそそくさと店を出ると、通りを春風が心地よく吹き抜けた。人々は忙(せわ)しなく行きかい、それぞれの仕事に励んでいる。

「旦那、いいんですかい？ 帰ったらまた銀次さんにまた叱られるんじゃないんですかい」

「いいんだよ、どうせあいつの小言なんて大したこたあ言っちゃいねえ。それより御坊、薄汚ねえてめえについてこれちゃかなわねえ」

「へへっ、こいつあ気づきやせんで」

「それより御坊、ひとつ頼まれてやくれねえか」

「へえ、なんでございやしょ」

「さっきの桐生屋へ行って、調べてきてもらいてえんだ」

半刻ほど過ぎ、弥平は弥生屋へと着いた。店先では鼻をたれた小僧がのんびりと箒で掃いている。

「ごめんするよ」

帳簿をつけていた番頭が顔を上げた。

「いらっしゃいませ」

「主はいるかい。俺は質屋の弥平ってもんだ。烏帽子の件でって言やあわかるだろ」

「は、はい、ただいま！」

番頭が奥へと消えると、程なく背の低い初老の男と共に戻ってきた。

「これはこれは遠いところよくいらっしゃいました。私が主人の彦左衛門と申します」

「邪魔しますよ。熊谷で質をやってる、灘屋の弥平と申します」

「烏帽子の件でと聞きましたが……何かご存知で？」

彦左衛門は框に正座し、弥平に話しかけた。

「ええ、さっき知り合いから聞いたんだが、なんでも烏帽子を無くしたという人がいると聞きましてね。烏帽子なんか質にくることなんて滅多にねえことですから、もしやと思って。ただ、仮にも抵当に出されたもんですから、はいわかりましたとお渡しするわけにゃあいきません。詳しい経緯をお話してくださいませんか。質に出した者との人相が一致するなら、事情によっちゃ弥生屋さんにお渡しすることも考えますよ」

「左様でございますか。ではお話いたしましょう。実は先日、その烏帽子を頭に載せて富くじを引きましたところ……」

「ああ、そこらへんの話は聞きました。聞きてえのは、なぜ天神地祇の頂がそちらさんの元になのかです」

弥平は腕を組み、あえて威圧的に見えるように、声を荒げた。

「は、はい、実は私、その烏帽子を桐生屋さんからご利益があると聞いていても経ってもいられず、買いましたね」

「いくらで買ったんで？」

「えっ、それはですね……」

彦左衛門はうつむき口ごもる。どこかしら顔が青ざめているようにも見える。

「言えねってのかい？ まあいいでしょう、それで富くじに当たって、それから？」

「は、はい、それでこれは確かなご利益があると思い、用心棒の先生を雇いましてね、蔵を守っていただいてたんでございます。ところが、ある朝のこと、いつもなら蔵の前に立っていただいているはずの先生がおらず、蔵の鍵も壊され、烏帽子といくつかの骨董ごと忽然と消えていたのでございます」

「ふうん、そういうことですかい。確かに身なりの良くねえ浪人者が、骨董品と一緒に烏帽子も持ってきたな」

「さ、左様でございますか！ では早速私どものほうに……」

「おっと、銭も払わず持っていったりはしねえよな？」

「も、もちろんでございます。それでいくらほどお支払いすれば……」

「そうだな……まあ百両を二度も当ててんだ。次に当たる分も入れて五百両ってとこでどうだい」

「ごっ、五百！」

彦左衛門は驚きのあまり、正座のまま飛び上がった。その様子を見ていた番頭も驚き、筆を落とした。

「こっちは流れてもねえものを売るって言ってんだ。御法度を破るからにゃ相応の対価ってもんが必要だか

らな。別にいらないうらいいなだぜ？ 流れたら適当に俺が使うまでだ」

「と、とてもじゃないがそんなに支払えない！」

「そうかい、じゃあこの話はここまでだ。またな」

「ちょ、ちょっと灘屋さん！」

弥平は弥生屋の暖簾をくぐり、後ろも振り返らずに帰路へとついた。

途中灘屋近くの甘味処で団子をほお張っていると、坊主がちょうど通りかかった。

「おう、御坊。ちょうどいいところに。どうだった」

「これは旦那、またおいしそうな団子でございやすな。え、いいんですかい？ じゃあ遠慮なく」

「おいおい、俺はまだいいともわりいとも言ってねえぞ」

と弥平が言い終わるころには坊主はすでに三つ目の団子を口に入れるところだった。

まもなく坊主は串を皿に置き、手を合わせた。

「ふー、走り通しでやんしたから、候（のんど）も腹も悲鳴を上げていやしたよ」

「ああ、悪かったな。それでどうだった」

「旦那のおっしゃってた通りといいやしょうか、値段も烏帽子を買った相手についても、言葉を濁していやしたね」

坊主は弥平の湯飲みを勝手に取り、茶を啜った。

「まったく、相変わらず意地きたねえなあ。まあいい、それと桐生屋が富くじを当てたってのはどこの天神だったんだい？」

「そいつは柏木天神で、篠本の葵屋の御布施で催していやした」

「なるほどな。今度は葵屋か。まあこいつあ弥生屋と桐生屋だけじゃなりたたねえからな。あと一人かそれより多くの人間が絡んでなきゃできねえんだ」

「旦那？ 一体何の話で？」

弥平はにやりと笑った。

「見切ったぜ、このからくり」

「おい銀次」

店の奥から銀次が摺り足で歩いてくる。

「なんですか、旦那様。まもなく寄合の時間でございますよ」

「銀次、わりいが平左親分のところに使いを頼まれちゃくれねえか」

「構いませんが、なんの御用で？」

「人相書きを描いた。こいつを親分のところへ」

弥平は畳んだ半紙を銀次に渡した。

「に、人相書き、でございますか？」

「ああ、人相書きだ。一筆も添えてあるから、渡せばわかる。それと……」

弥平は棚の後ろから天神地祇の頂を取り出した。

「なんですか？」

「銀次、お前の見立てじゃこの烏帽子、価値はどれくらいだ？」

「え？ ええ、そうですね、特に特徴のない烏帽子でございますね。御公家様がお使いになられてたとする

にはちょっと痛みが進みすぎているか？ 古めかしくはありますが、位の低い者が使われていた、そこそこ有り触れた品ではございませんでしょうか」

「そこいらのお針子でも作れると思うかい？」

「器用な者ならたやすいでしょうね」

「ふうん、そうかい。やっぱりそれくらいだよなあ。じゃあこいつを……っと」弥平は烏帽子を銀次の頭に載せた。「こいつを被って親分のところに行くんだ。そして親分にその烏帽子を渡してくれ」

「ご、ご冗談を！ 嫌ですよ、こんな恥ずかしい真似！」

取り外そうとする銀時を、弥平が押さえつける。

「すまないがこいつはやってもらわなきゃならねえ。おめえやこのお店に関わる全ての者の命に関わるんだ」

弥平は今までに見せた事のないような真面目な顔で銀次に言った。

「だ、旦那様！ そもそもこれは質のもので……」

「いいから、やってくれ！ もし道中で、これは弥生屋のとか、天神地祇のとか聞かれたら、『ああ、これがそうだ』と大きな声で伝えるんだ。親分以外に、絶対に誰にも渡すんじゃねえぞ。いいな？」

弥平のあまりの気迫に押され、銀次はしぶしぶ了承した。

「……旦那様、このようなことをなさるからには、相応の理由があるのでしょうか」

「ああ、あるな」

「……帰ったらきっちり理由をお聞かせいただきますからね！」

銀次は頭に烏帽子を載せ、店を出た。

それから数日後の早朝のこと。

「おう、弥平はいるか」

灘屋へ平左がやってきた。

番台に座っていた銀次は立ち上がり、平左を出迎える。

「これはこれは親分、ようこそいらっしゃいました。少々お待ちくださいませ、今起こして参りますので。まったく、寝起きが悪いたらありやしない。旦那様、旦那様！」

しばらくすると寝間着姿の弥平が表へ出てきた。

「ふぁ～あ。あー、親分、おはようござえます」

「おはようじゃねえよ、もうお天道様はいい具合に登ってるぞ。今日はこないだの件で来た。おめえの描いた人相書きの男、見つかったぞ」

「へえ、そうですか！」

弥平は妙に甲高い声を上げた。

「朝っぱらから素っ頓狂な声をだすんじゃないよ。こちとらの調子が狂わぁ」

「一体何のお話だったんです？」

銀次が横から口を出した。

「ああ、こないだおめえに烏帽子被って行って貰った話だよ」

「ありや見ものだったな」平左は腹を抱えて笑った。

「まったく、笑い事じゃありませんよ。後から理由を聞いて、私は本当に震えたんですから！」

「悪い悪い、まあその件で、あの烏帽子を売りに来た男が全部話したそうだけ」

「そう、旦那様、あの話、ちゃんと最後まで聞いておりません。あの烏帽子を被ったおかげでここに賊がは

いることがなくなったなんて聞いて、怖くてそれ以上聞くのをすっかり忘れておりました。結局どういうことだったんでございますか？」

銀次は弥平に詰め寄った。

「ああ、まあ落ち着け。話してやるから」

弥平は煙管に火をつけた。

「あの烏帽子、やっぱり縁起物だなんて話は嘘っぱちだったんだ。あれは天神地祇の頂なんてありがてえもんじゃねえ。古びた布を使ってお針子にこさえさせた、ただの烏帽子さ。そしてこいつは、その縁起を利用した詐欺だったのさ」

「詐欺ですって!？」

「馬鹿、声大きい!」平左は銀次をたしなめた。

「詐欺だなんて、十両騙せば死罪でございますよ!？ そんなのに旦那様が関わっていたんでございますか？」

銀次は顔を青くしている。

「はは、まさか。俺がんなことするわけねえだろ。あの烏帽子を使って富くじを当てたって話、これ自体が全て仕組まれてたってえことだ」

「なんと! 左様でございましたか」

銀次はほっと胸を撫で下ろした。

「ああ、からくりはこうだ。まず葵屋が神社に掛け合い、富くじを催す。それに烏帽子を被った桐生屋が加わる。編笠や手拭じゃあそこらじゅうにあるから目立たねえ。烏帽子みたいな珍奇なもんを被ってりゃ、周りの人間の心に残る。それが狙いだったんだ」

「なるほど」

弥平は煙管の灰を炉に落とし、再び口に運ぶ。

「そしてその烏帽子をかぶったやつが、突留に当たる。ここで烏帽子と御利益が結びつくってわけだ。しかしこればかりはどういうからくりで、思った奴に当てることができたのかはわかんねえ。まあ籤を引く奴に十両もつかまたんじゃねえか。そんだけ持たせりゃ、どんな輩も下衆になるだろうさ」

弥平は店先を眺めながら、大きく煙を吐いた。

「しかし一回だけなら偶然ってこともありうる。そこで二回目、弥生屋の登場だ。弥生屋さんも同じように烏帽子をかぶり、同じように突留を当てた。そしてこの烏帽子の御利益は本物だということになり、その噂は富くじに参加してた者たちを通して、あっという間に広まった」

「ああ、ここまでは弥生屋たちの思惑通りだったってことだ」平左が言う。「だが弥平のよこした一筆に、ああそうだ、銀次、おめえが烏帽子被って泣きながらやってきたときの覚書だぜ? そいつにからくりのことが少しだけ書いてあった」

「はっはっは、銀次、おめえ泣きながら行ったのかよ」

「な、泣いてなんかおりません!」

「顔が真っ赤だぜ?」

「旦那様!」

銀次は弥平の肩を拳で打った。

「おいおい、仲がいいのはいいが続きを話すぜ。こちとら暇じゃねえもんでね。その覚書には、万が一にも灘屋にこの烏帽子が目当ての賊が入っちゃいけねえから、そっちで預かってってくれってな。あとこの人相書きの男を捜せとも」

そう言うと平左は懐から一枚の半紙を取り出し、墨で書かれた似顔絵を銀次に見せた。

「何のことか最初はわからなかったが、弥平のことだ、意味なくそんなことさせるた思えねえ。翌々日に漸（ようや）くその人相書きの男が見つかったんで、弥平を番所へ呼んだ。そして弥平から詳しく聞いてやっとわかったってわけだ」

「ああ、それから俺が番所でその男に聞いたんだ。『あんた、この烏帽子に御利益がないことはわかってたんだろう？』ってな。弥生屋の周りであんだけ騒がれてんだ。売りに来たこいつがそのことを知らないわけがない。にも関わらず、こいつはその御利益のことは一切語らず、他の骨董と同じように質に出して帰った。ってこたあ、最初から御利益がないことを知ってたってわけだ。おう、腹減ったな。ちょっと握り飯でもとってくらあ」

そういうと弥平は唐突に竈へと去っていった。

「まったく、勝手なやつだなあ」

「それで、それからどうなされたんです？」

銀次は平左に問いかけた。

「ああ、それから弥平はこう聞いた。『弥生屋はこいつを誰に売るつもりだったんだ』ってね。すると男は大黒屋と答えた」

「またあの大黒屋さんですか！ まったく、凝りもせずまたこういうのに手をだして……」

銀次はため息をついた。

「そこで大黒屋さんに聞いてみたら、まさにその烏帽子を買おうとしていたわけだ。ちなみに三百両で買うつもりだったんだとよ」

「さ、三百両！」銀次の甲高い声が通りにまで響いた。

「つまりこうだ、葵屋の富くじ桐生屋が買い、桐生屋に突留が当たるよう仕向けた。桐生屋に当たったら次は桐生屋が富くじを催し、それを弥生屋が買う。弥生屋に突留が当たるようにまた偽装し、この烏帽子に御利益があるかのように十分周知させたところで、高値で売りに出す」

「なるほど」と銀次は頷いた。

「やはり要はどうやって突留に当たるようにしたかってこったな」弥平が両手に握り飯を抱えて戻ってきた。「まあ袖の下に失敗したら大変だが、元が盗賊だ、手先は器用なんだろうから自分たちでなんとかしただろうさ」

「大変ってなんだ。まるで盗賊のかたを持つみたいだな」

「悪いな、罪の良し悪しにゃあまり興味ねえんだ。からくりには興味がある」

「弥平らしいな」

弥平は框に座り笑った。

「そんなわけで、葵屋と桐生屋が百両を支払い、桐生屋と弥生屋に百両ずつ渡り、最後に三百両入って、うち百両を桐生屋が、二百両を葵屋が取れば、めでたく三者が百両得をするって算段だ。あの怪しい坊主を使って調べさせたが、葵屋が富くじに当たったって話はなかったから、関係してんのはこの三者までだろうよ」

「なるほど……旦那様は普段はだらしがないのに、こういうことになると驚くほど頭が冴えますね」

「うっせえ」

弥平は鼻で笑いながら銀次を手の甲ではたいた。

「ちなみに烏帽子を売りに来た男はなんでも、用心棒の駄賃が不満だったんだと。だから酒代のたしにでもと、勝手に蔵の鍵も開けて骨董持ち出したそうさ」

「……ところで旦那様、素晴らしい推理の最中でしたが、私、旦那様の鼻についてお米粒が気になって仕方がありませんでした」

「もっと早く言えよ！」弥平は鼻の米粒を指で掬い、口に運んだ。

「えーっと、そしてその烏帽子と骨董を売りに来たのが偶然うちだったと、こういうわけでございますね」
「ああ。用心棒は大黒屋に烏帽子を売ることも知っていたが、御利益の話をすれば足がつくからと、何も言わずに質に流した。これが『天神地祇の頂』のからくりの全てだぜ。鼻から騙すつもりで拵（こしら）えた偽の縁起物だったってわけだ」

「まったく、大黒屋さんは懲りない御方ですね。そんなにも儲かっているのなら、今更そんなものに手を出さなくてもいいでしょうに」

「あの人はきっと縁起物が好きなんだろうよ。ま、蓼食う虫も好き好きって言うじゃねえか。金があるんだから好きにさせりゃいいさ」

弥平は手についた米粒を吸い取りながら言った。

「そりゃ嗜みは人それぞれではございますけれども……」

「ところであの烏帽子、俺は弥生屋に五百両で売るって言ってやったんだ」

「はぁ……どういふことでございますか？」

「もちろん売る気はねえし、こっちの見立て通りなら向こうも買うことはねえよ。ありゃ造りが荒かっただろう？ だからもし烏帽子が戻らないと知れば、またお針子にでも作らせるだろうと思ってたが、万が一にもここに賊がやってきて烏帽子を奪っていったら危ねえと思って、ここにはないってことを知らしめるために銀次、おめえにあんなことさせたってわけだ。悪かったな」

「なるほど……それにしてももっと教えてくれればよろしかったのに」

銀次は両手を腰に添えてため息をついた。

「だがまあ、弥平のおかげで詐欺を未然に防げたってわけだ。何の縁起もない物を御利益があるかのように装って、しかもそのために富くじの偽装までしてたんだから罪は重いぜ。そうそう、ちなみにあの弥生屋と桐生屋と葵屋、こいつらは調べてみりゃなんと、十五年前の五千両を盗んだ賊の一味ってこともわかったんだ。そのときの金を元に商売始めたみてえだが、元々商才なんてねえ奴らだ。資金も底をつき始めて、こんな小賢しいことをやったらしい。まったく、たいしたお手柄だぜ、弥平」

そういうと平左は弥平の方を強く叩いた。

「痛えなあ。まあ、救われた人がいるならそれでいい」

弥平たちは高らかに笑った。